

幹事長日誌

(2022年4月1日～2023年3月31日)

川口博史／畑 康樹

2022年

4月1日(金) :曇り

新年度が始まった。まだしばらくはCOVID-19との戦い、というか共生が続きそうな予感。世界ではロシアのウクライナ侵攻など暗い話題だらけであるが、プロ野球も観客制限なしで開幕したし、少しずつ楽しいことをしていきたいと思う。

4月7日(木) :晴れのち曇り 於／ローズホテル横浜でハイブリッド開催

ドボベツトフォームを使いこなす (共催：レオファーマ株式会社、協和キリン株式会社)

「もう一度考えてみよう、乾癬外用療法」山口由衣。ディスカッサント：渡部秀憲、蒲原毅、野村有子。昨年横浜市大の教授に就任した山口先生の講演。1日1回の外用でステロイドとビタミンD誘導体が同時に塗れるのがうりのドボベツトだが、軟膏以外にも、ゲルさらにはフォームと剤型が増えて、幅広く使われるようになった。乾癬ではバイオ製剤関連の講演会は数多く開催されているが、基本の外用療法に関する講演会もたまにはいいものだ。ハイブリッド開催であったので、自宅で飲食しながら聴講させていただいた。Web参加44名、現地参加8名。

4月23(土)～24日(日) :雨のち曇り 於／かごしま県民交流センター

第38回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会

島田辰彦会頭の会がハイブリッドで開催された。理事として最後なので、久しぶりに対面で参加した。せっかくの機会なので、九州新幹線で乗り鉄して行った。座長や演者がリモートで発表のセッションもあり、従来の学会とは勝手が違ったが、いろいろな先生達と直接話をする機会がありとても新鮮だった。文化講演では焼酎の勉強をすることもできた。天候はあいにくの雨模様だったが、逆に社会勉強しないで会場にいることとなった(笑)。

5月13日(金) :雨

金丸哲山、宮川俊一監事より医会活動の監査をしていただき、無事お認めいただくことができた。来年こそは対面でご指導いただきたいものだ。

5月21日(土) :曇り 於／そごうミーティングルーム

常任幹事会

2020年1月18日以来の対面での会であった。今回は役員の改選を含む審議事項を、幹事会、総会の順に郵送で執行しなければならないので、この後の手続きがタイトである。お酒を控えて速やかに処理をして、幹事長としての職務を全うしなければ！

5月28日(土) :晴れ

第35回Joy Derma Club (共催：佐藤製薬株式会社)

6月11日(土) :曇り

第70回神奈川医真菌研究会

神奈川県皮膚科医会×マルホWeb学術講演会 (共催：マルホ株式会社)

「皮膚のトリビア2022」浅井俊弥、「多汗症の病態と治療」横関博雄。

浅井先生は相変わらずあちこちで情報を仕入れていて頭が下がる。今回もサル痘など、我々にとって興味深い話を提供してくれた。横関先生はオンラインでの講演であったが、ライフワークでもある多汗症の病態診断、そして従来からの治療や新薬についてお話しいただいた。神奈川医真菌とバッティングしてしまい申し訳ありませんでした。参加者84名。

6月29日(水) : 晴れ 於/ Zoomにて

第1回健保委員会

第166回例会のQ&A他。最近お疲れのようで意識消失してしまい、申し訳ありませんでした。

7月3日(日) : 雨時々曇り 於/ オンライン

神奈川県皮膚科医会総会・第166回例会 (共催：大鵬薬品工業株式会社)

テーマ「化膿性汗腺炎」 担当幹事：江川ゆり

教育講演「治療目標を意識したアトピー性皮膚炎治療 ～新しいガイドラインを踏まえて～」

埼玉医科大学皮膚科教授 常深祐一郎

特別講演「化膿性汗腺炎の診断と治療」

虎の門病院皮膚科部長 林 伸和

総会で役員人事が承認され、無事に幹事長の任期を終えることができた。今までご協力いただき誠にありがとうございました。今後は畑ちゃんこと、畑康樹新幹事長、よろしくお祈りします。

川口会長から幹事長のバトンを頂いた畑です。神奈川県皮膚科医会の会員の皆様、よろしくお祈りします。幹事長を引き継ぐまでは企画委員長を拝命し務めてきました。これまで担当幹事になられた先生方とは頼りないながらも、苦勞しながらより良い例会を目指して努力してまいりました。これからはさらに会員の皆様のお力になれるよう、裏方として精進していきたいと存じます。



7月6日(水) : 曇り 於/ 横浜ベイシェラトンにてハイブリッド開催

神奈川県皮膚科医会第167回例会準備会 (共催：マルホ株式会社)

昨年までは企画委員会委員長として仕切っていたが、今回からは幹事長として参加。しかし、まだ河原委員長に交代したばかりなので、今回は私が仕切って会を進行することとなった。場所は共催マルホのご厚意で以前よく使わせていただいた、横浜ベイシェラトン最上階のマンハッタンルーム。まだまだコロナの影響は無視できなく、ハイブリッドで行った。現地参加10名、Web参加7名、欠席3名であった。第166回の反省では参加人数は計125名。以前に比べると参加者はまだ少なめ。蒲原先生の健保Q&Aコーナーでは開始直後数分間、音声が届かなくなるといったトラブルもあったが、何とか乗り切ったところは蒲原先生の力のなせる業ですね。江川担当幹事、本当にお疲れさまでした。第167回以降の例会企画の検討、新しく担当が決まった眞鍋泰明先生、生駒憲広先生からもご自身の目指す方針についてお話ししていただき、新任のご挨拶として川口会長、河原委員長から一言ずつ頂いて会は終了した。

このあたりからコロナは第7波を迎え、身近にも感染する人が増えてきた。気を付けねば！

川口会長が通帳名義を鎌田前会長から変更するのに四苦八苦。特にゆうちょ銀行は大変らしい。

新体制で委員会の委員長交代や、編成変更もあり、委員会招集も少し混乱気味。

9月14日（水）：曇りのち晴れ 於／Zoom

イベント委員会（共催：マルホ株式会社）

11月3日（木）にWebで美容をテーマとして配信することが決まった。また、従来の皮膚の健康委員会と合併した為、今後秋は一般市民向けの講演、春は学校保健（内科・小児科向け）などを企画していければという案が出た。しかし、それらも今後のコロナの感染状況によるであろう。

9月15日（木）：曇り 於／Web

第29回神奈川在宅医療勉強会

特別講演Ⅰ「コロナ禍での在宅医療と必要とされる皮膚科往診」

みずじゅんクリニック 水上潤哉

特別講演Ⅱ「爪白癬は必ず確定診断後に治療を始める ～新しい診断方法も有効活用する～」

埼玉医科大学皮膚科教授 常深祐一郎

参加者81名だったが、内訳をみるとコロナ前に比べて圧倒的に看護師の参加が減っている！ちなみにこの日は娘と久しぶりにブルーノート東京にJazzを聴きに行き、帰宅後視聴させていただいた。

10月10日（月・スポーツの日）：雨のち曇り

横浜市内某所で新しい秘書さんの熊谷啓子さんと瀬尾さん、鎌田前会長・川口会長・私とで秘書業務引き継ぎを行った。

10月15日（土）：曇りのち晴れ 於／そごうミーティングルーム

常任幹事会

幹事長になって初めての常任幹事会であった。第167回例会のプログラムはここで最終チェック。懇親会、幹事会をどうするかについて議論。コロナ第7波は収束を迎えつつあるが、まだまだ予断を許さない状況であるため飲食は無しで、それぞれ行う方針とした。少しずつであるが、コロナ後に向けて何ができるのかを模索している状況である。

11月3日（木・文化の日）：晴れ 於／Web

皮膚の日イベント（共催：マルホ株式会社）

テーマ「美容」

講演1「美容皮膚科を知っていますか？美容皮膚科を受診する前の基礎知識」

テティス横濱美容皮膚科院長 濱野英明

講演2「汗トラブルと対策 ～スベスベお肌になるヒント～」

野村皮膚科医院院長 野村有子

視聴者数77名。

どちらの演者も慶應大学の先輩・後輩という事で現地に伺い、閉会の辞を述べさせていただいた。

11月6日（日）：晴れ

新旧秘書さんお2人で第167回例会の案内状発送を行っていただいた。私も同席したかったが、娘がカナダに帰る為空港に送っていくアッシーとしての役割があり、欠席させていただいた。その後、無事発送作業が終了したとメールで連絡をいただいた。常任幹事会が終わって約2週間の間、慣れないために担当幹事の根岸晶先生、川口会長とも密に連絡を取り合いながら作業終了。ほっと一息がつけた。

11月30日（水）：晴れのち曇り 於／Zoom
第2回健保委員会
第167回例会のQ&Aに対する回答を審議。今回担当は小林誠一郎先生。お疲れさまでした。

12月4日（日）：晴れのち曇り 於／関内新井ホールとWeb配信のハイブリッド開催
神奈川県皮膚科医会第167回例会（共催：マルホ株式会社）
テーマ「新型コロナウイルス感染症と皮膚疾患」担当幹事：根岸 晶
教育講演「アトピー性皮膚炎と酒さのお話」NTT東日本関東病院皮膚科部長 五十嵐敦之
特別講演「パンデミックの時代—COVID-19、サル痘、带状疱疹について考える—」
愛知医科大学医学部皮膚科学講座教授 渡邊大輔
参加者180名。

幹事会も久しぶりに対面で行った。新執行部になって初めての顔合わせである。企画委員会の時、根岸先生が、コロナの話題をと提案されたとき、この会が行われる頃にはすでにコロナは収束していて、タイミングを逃すのではないかと危惧されたことを昨日のことのように思い出す。とんでもない、第8波が押し寄せつつあると同時にサル痘という訳の分からない感染症まで飛び出し、時流に乗ったいい講演会だった。根岸先生、お疲れさまでした。懇親会も場所だけを提供していただき、残った会員と演者で少し会話を交わせたのは良かったが、やはり飲食抜きというのは手持無沙汰なのは否めない感があった。

12月8日（木）：晴れ 於／TKPガーデンシティ横浜にてハイブリッド
神奈川県皮膚科医会第168回例会準備会（共催：アッヴィ合同会社）
この会より河原委員長主導で進行。第172回の内田敬久先生まで決定した。

12月10日（土）：晴れ
神奈川県皮膚科医会冬の勉強会 ミチーガ[®]発売記念講演会 in 神奈川
「開業医におけるアトピー性皮膚炎の治療について」 なごみ皮ふ科 齊藤典充
「アトピー性皮膚炎治療の新時代 ～かゆみコントロールがもたらす患者の未来」
関西医科大学皮膚科 谷崎英昭
ミチーガ[®]は発売されて4か月経とうとしていたが、私はまだ使用したことがなかった。開会のあいさつをさせていただくにあたり少し勉強し、さらに講演会を聴いて理解を深めた。使用するに適する患者さんが来たら、是非使ってみよう！ でも値段は相変わらず高いなあ。

2023年

1月1日（日）：晴れ
新年あけましておめでとうございます。今年こそいい1年になりますように。
例年元旦は自宅で過ごすことがほとんどで、これまで自宅以外で正月を迎えたのは、浪人時代に年末年始の受験勉強合宿に参加した記憶しかない。つらい辛い勉強をしながら、夕食にお雑煮を食べた苦い思い出が蘇るので、これまで極力元旦は自宅だと願ってきた。しかし、子どもたちも家を離れ、妻も私だけのために正月の用意をしたくないという希望を聞き入れ、今年は某ホテルにて過ごした。それはそれで新鮮であった。
しかし、危惧していたように暮れからいよいよコロナ第8波が押し寄せてきたようだ。インフルエンザとのダブル感染も多いとされる。発表される感染者数は全数把握がすでに厳密に出来ないため、氷山の一角という説もある。益々、例会をはじめ委員会などでも感染者を出さないよう注意深くやっていく必要があるだろう。

- 1月21日(土) : 晴れ 於/そごうミーティングルーム
常任幹事会
 幹事長になって2回目の常任幹事会。少しは慣れたつもりだったが、まだまだ川口会長や周りの幹事の先生方に助けられながら、何とか3月の第168回例会に向けてのプログラム最終チェックや、その他の事項について検討を重ねた。
 ちなみにこの後、友人たちとの会食に加えて神奈川県医師会の新年会とトリプルブッキングであった。
- 1月26日(木) : 晴れ 於/ Web開催
広報・編集委員会
 申し訳なかったのですが、先に決まっていた日本臨床皮膚科医会の編集委員会とブッキングしてしまい、こちらは私が編集委員長、ハイブリッド開催であったため、泣く泣く欠席させていただいた。
- 2月3日(金) : 曇り
 川口会長のクリニックにて、新しい秘書さんの熊谷さんが川口会長と奥様と共に第168回例会の案内状などの配送作業実施。私は就業中の為、参加できず。川口会長・奥様、有難うございました。
- 2月16日(木) : 晴れ 於/ Web開催
第17回神奈川県フットケア研究会
 「下腿・足の病変・足爪白癬とそのケア」 さとう皮膚科 佐藤俊次
 出席107名(医師87名、看護師17名、その他3名)。
 佐藤俊次先生は日本臨床皮膚科医会の編集委員会でご一緒している縁もあり、座長を務めさせていただいた。開会の辞をいただいた浅井寿子先生、わざわざ駆けつけてくださった小野田委員長もお疲れさまでした。とても分かりやすく良い講演で、パラメディカルの人に聴いてもらえればなど座長をしながら考えていたが、やはり看護師さんの参加が少ない。
 ちなみに佐藤先生は日臨皮雑誌の「なにこれ、へえ」コーナーの生みの親。ダーモスコピーに関しても造詣が深い。
- 3月1日(水) : 曇りのち晴れ 於/ Zoom開催
第3回健保委員会
 第168回例会のQ&Aに対する回答を審議。今回担当は生駒憲広先生。お疲れさまでした。葉書で送られてきた質問に対する回答に加えて、今回は新しく認められたデルマクイックHSV検査についてとアメナリーフ®のPIT療法について説明が加えられた。社保審査はすでにAIによる審査が導入され、我々審査員もこれまでの審査の方法とはずいぶん見方が違ってきており、時代は変わりつつある。そんななか、自宅でPCを用いての審査も可能となり、その点はそれを利用している委員にとっては少し楽になったかな。
- 3月5日(日) : 曇りのち雨 於/ 関内新井ホールとWeb配信のハイブリッド開催
神奈川県皮膚科医会第168回例会 (共催: アッヴィ合同会社)
 テーマ「基礎から見つめなおすHPV」 担当幹事: 三井純雪
 教育講演「アトピー性皮膚炎の全身療法について ~ JAK阻害剤を中心に ~」
 中東遠総合医療センター参与/皮膚科・皮膚腫瘍科診療部長 戸倉新樹
 特別講演「HPVのがん化機構」
 一般社団法人学びやの里/北里柴三郎記念館館長/北里大学名誉教授 北里英郎
 参加者146名。

幹事会は久しぶりにお弁当を食べながら行われた。会長の選択で崎陽軒の春の特別弁当。しかし、私は慣れないため、まだまだ味わって食べる余裕がない。幹事の先生から幹事会もハイブリッドでやってもらえると参加できるのだがという意見を葉書でいただいた。しかし、昨今メーカーの社内規定も厳しく、幹事会は完全に分離、純粹に講演会だけは共催できるが、それ以外は無理というところも増えてきており、今のところ難しい。

講演会も多くの質問が飛び交い、活気あるものであった。三井先生、お疲れさまでした。

3月9日（木）：晴れ 於／TKPガーデンシティ PREMIUM横浜西口にてハイブリッド開催

神奈川県皮膚科医会第169回例会準備会（共催：佐藤製薬株式会社）

河原委員長の進行のもと、第169回例会の準備とそれ以降の例会の検討がなされた。第173回は大松華子先生に担当が決まった。

かくして怒涛のような半年が過ぎた。この幹事長日誌も川口会長から、忘れてしまうので事あるごとにこまめに記載していった方がいいよとアドバイスをいただいた。確かに初めのころは書いていたが、いつの間にか保存していたはずのデータが消失？、その後意欲が失せてしまった。そういえば子どものころの日記も長続きしなかったが、結局は原稿締め切りぎりぎり、過去のメールを眺めながら記憶をたどって書いている始末である。三つ子の魂百までを実感している。

委員会報告

Joy Derma Clubだより

山川有子

Joy Derma Club (JDC) は、2005年に発足し、1年に2回、講演会を開催して参りました。新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、2020年度の1年間は中止となりましたが、2021年度はWebにて、また2022年度は第35回はHybrid、第36回はWebにて開催することができました。たいへんお忙しい中、ご講演いただきました講師の先生方にあらためて感謝申し上げます。また、ご参加いただきました女性医師の方々、共催いただきました各社に、厚く御礼申し上げます。今後は、以前のように託児所も設け、会場に多くの女性医師が集まり、楽しく華やかな中で、学会や講演会ではあまり取り上げられないテーマについて勉強することができますように、と祈ってやみません。

●第35回Joy Derma Club

日時：2022年5月28日（土）

会場：Hybrid開催

参加者：86名

共催：佐藤製薬株式会社

はじめに

令和4年度診療報酬改定は+0.43%、うち医科は+0.26%とプラスではあったが、一方で薬価は-1.35%と大幅に引き下げられた。ここでは皮膚科に関する主な改定内容を紹介するとともに、皮膚科における保険請求上の留意点について述べてみたい。ここに記載した内容の一部は個人的見解を述べたものであって、公式見解ではないことを申し添える。

皮膚科に関する主な改定内容

○S-Mの増点

61点から64点と3点の増点となった。

○ダーモスコピーの適応拡大

円形脱毛症、日光角化症でも算定が可能となった。

○手術料の増点

前回の改定に引き続きいくつかの手術料が増点となった。創傷処理、皮膚切開、デブリードマンなどが増点され、超音波式デブリードマン加算が新設された。

○オンライン診療でも皮膚科特定疾患指導管理料算定可

○下肢創傷処置、同管理料の新設

下肢とはいっても足関節より遠位の処置が対象である。管理料算定にあたっては施設基準が設けられているが、その詳細がはっきりせず混乱している。通常の創傷処置とどのように使い分けるかも明らかでない。

○皮膚科特定疾患指導管理料

オンライン診療でも対面診療の0.87掛けで算定ができるようになった。

○白癬菌抗原定性

イムノクロマト法による爪中の白癬菌抗原の測定が可能となった（キットの発売は6月頃）。ただしKOH法による直接鏡検法が基本であり、留意事項に従って行う必要がある。

○リフィル処方箋

保険医がリフィルによる処方が可と判断した場合に、処方箋のリフィル可欄にレ点を記入すると3回までその処方箋が使用できる。1回当たり投薬期間及び総投薬期間については医師が医学的に適切と判断した期間とする。皮膚外用薬も対象となるが、日数を記載する必要がある。湿布薬は対象外である。

エイズ拠点病院でのHIV関連検査について

明文化したものはないが、今まで東京都ではエイズ拠点病院においては入院、検査、手術前のHIVスクリーニング検査を保険請求することは認められていた。一方、拠点病院以外では認められず、病院の持ち出しとなっていた。本年4月より、入院前、手術前及び内視鏡検査前におけるスクリーニング検査としてのHIV関連検査は原則認めないこととなった。医療財政の逼迫が背景と思われるが、他の道府県も追随するものと思われる。

アレルギー性皮膚炎という病名について

ありそうな病名であるが、皮膚科の教科書にはまず記載されていない。皮膚科以外の医師が使用していると思われるが、ICD10の分類ではアレルギー性接触皮膚炎の一つに分類されておりIV型アレルギー反応による疾患とみなされ、非特異的IgE・特異的IgE検査はI型アレルギー疾患に用いる検査であることからこの病名での検査は適応外・不適切と判断される。そもそも皮膚科の教科書にはでてこない病名なので皮膚科を標榜するからにはアレルギー性皮膚炎という病名は使うべきではないと考える。

最適使用推進ガイドラインについて

新規作用機序の高薬価薬剤が適正に使用されるようにするためのもので、皮膚科領域ではデュピルマブ、JAK阻害内服薬で定められているが、実は2016年にニボルマブで定められたのが端緒となる。留意事項通知に



五十嵐敦之先生

より、保険適用の対象を限定しており、厚労省はガイドラインを遵守しなければ、添付文書通りの処方であっても、レセプト審査で査定される場合もあり得ることを示唆しており、日本皮膚科学会の定めた使用ガイドランスとは意味合いが異なるものである。ちなみに乾癬生物学的製剤では定められていない。

ネイリン処方時の保険上の注意点

初回の処方の際には真菌直接鏡検などの真菌学的検査が必須である。ただし爪白癬に対する内服ないし外用の前投与薬がありネイリンへ変更する場合、改めての鏡検は必要とまではいえない。また、切り替えの際に間隔をあける必要はないと思われる。

ネイリン処方時、ルコナックなどの爪白癬外用薬の併用は認められないことが多い。

講演2：室内環境中のダニアレルゲンと環境整備による減少効果

東京アレルギー・呼吸器疾患研究所 環境アレルゲン班 白井秀治

日本の室内で検出されるダニの中で、チリダニ科ヒョウヒダニ属のヤケヒョウヒダニ (*Dermatophagoides pteronyssinus*) とコナヒョウヒダニ (*D. farinae*) が、室内環境アレルゲンとして最も重要である。ダニに関わる環境評価の方法は、形態学的にダニを数える、または免疫化学的にダニアレルゲン量を測定するという方法があり、掃除機などで回収された室内塵中のダニ数とダニアレルゲン量は相関する。患者はダニに直接暴露されるのではなく、糞や死骸などが小さくなった不定形な粒子に暴露される。そのため室内環境の実態把握には、ダニアレルゲン量を測定することが近年の主流である。ヒョウヒダニのアレルゲンは多くの種類があり、WHO/IUISのアレルゲン命名委員会に30超の登録がある(2021年現在)。ヒョウヒダニの主要アレルゲンとしては、グループ1アレルゲンとしてDer 1(ヤケヒョウヒダニの Der p 1、コナヒョウヒダニ Der f 1) と、グループ2アレルゲンとしてDer 2(同Der p 2とDer f 2) の2種類である。



白井秀治先生

アレルギー疾患における感作の成立や症状の発現には、環境中に存在するアレルゲンが用量依存的に関わると考えられている。小児や若年成人における室内アレルゲンへの感作、そしてその後の暴露が喘息の主要原因である可能性を示唆する一連の疫学研究が世界各地で行われるようになった。チリダニの主要アレルゲン(Der 1)量が $2\mu\text{g/g dust}$ 以上を感作が成立するレベル、 $10\mu\text{g/g dust}$ 以上を喘息の急性症状が生じるレベルという考え方の暫定閾値が提案され、これらの値は室内環境整備を行う際の指標として、世界各国で受け入れられている。

ダニ対策は患者家庭でセルフケアとして行われる。掃除機がけを寝具、寝室や居間の床に $20\text{秒}/\text{m}^2$ を週1回以上継続して行うことで、回収ダスト中のダニアレルゲン量は、大抵の場合減少する。寝具類を洗濯することは、シーツや布団カバー、布団側生地、中綿などの充填物に存在するダニアレルゲンの除去に役立つ。寝具表面のダニアレルゲン量を低値に維持する手段として、高密度織物を用いた防ダニカバーが有効である。家庭用の布団乾燥機や衣類乾燥機、コインランドリーの乾燥機による寝具の加熱処理は、殺ダニに有効である。住居内の湿度が低く維持されている場合、床面および寝具のダニアレルゲン量は、年間を通して低値に維持される。

ヒト住居において発生するダニ刺症として、吸血性のダニと刺咬性のダニによるものがある。吸血性ダニとしては、ネズミに寄生するイエダニ、ムクドリなどに寄生するトリサシダニなどがある。これら吸血性ダニは、吸血対象である宿主がヒトの住居に不在となる、死亡する、あるいはダニが増えすぎると、吸血対象を求めてヒトの居室へ侵入し、被害が出ることもある。被害が生じる場合、ダニを駆除するだけでなく、原因動物の駆除および巣の撤去を行うことが重要であり、さらにその巣が家屋内である場合、動物の侵入防止策を講じる必要がある。刺咬性ダニとしては、ツメダニによる被害がある。ツメダニは室内塵中のコナダニやチリダニなどを捕食する。偶発的に人を刺すことがあるが、ヒトへの吸血はない。対策としては室内の清掃を徹底し、

ツメダニとともに捕食対象のダニを駆除することが必要と考えられる。

(担当幹事：菅 千束、高橋さなみ)

●第36回Joy Derma Club

日 時：2022年11月5日（土）

会 場：Web開催

参加者：53名

共 催：サノフィ株式会社

講演1：実症例から考えるデュピルマブのポジショニング

～全身療法の使い分けと適切な導入時期について～

荻窪病院皮膚科 布袋祐子

アトピー性皮膚炎（以下、AD）は長年、治療にて十分な満足度が得られない、治療に難渋する慢性皮膚疾患の一つでした。従来の治療にはスキンケア、ステロイドを含めた外用療法、光線療法、抗ヒスタミン剤や免疫抑制剤の内服療法などが挙げられますが、いずれも効果に限界があるか、効果があっても副作用のため使用継続が困難で、患者さんにとっても我々皮膚科医にとっても、もどかしい時代が続いておりました。

近年、ADにおける病態の研究に飛躍的な進歩がみられ、疾患を引き起こすサイトカインなどの因子が解明されてまいりました。特に最近では2型炎症反応を主軸とした2型サイトカイン、痒痒・搔破、バリア破壊の3つの因子が相互に作用して病態を形成している事が明らかとなり、実臨床においても応用される様になってきました。

2018年にはAD初の生物学的製剤であるデュピルマブが登場し、患者さんそのものの治療に大きな変化をもたらしました。ヒト型抗ヒトIL-4/13受容体モノクローナル抗体であるデュピルマブは2型炎症反応において重要な役割を担っているIL-4/13を抑制する事でバリア機能障害、痒痒、皮膚炎症の改善に働きます。特にIL-4はその産生源であるヘルパー T2細胞（以下Th2）の分化・活性にも働く事（自己分泌）が知られており、IL-4を抑制する事でTh2そのものの機能が抑えられる事が確認されております。よってデュピルマブはIL-4/13のみならずTh2から産生されるIL-5、31の機能も抑制できることが明らかとなり、ADに関わる必要なサイトカインをバランスよく抑える薬剤である事が分かってきました。ここ数年における使用経験からも、既存治療で難渋していた中等症以下のAD患者において、高い有効性があるのみならず、高い安全性もみられ、ADの長期寛解維持に適切な治療薬の一つであることが言えます。

また最近ではADに対し、続々と新薬が登場してまいりました。どの薬剤をどの患者さんにどの様なタイミングで使用するかは我々皮膚科医の腕にかかっております。私見ではありますが、ADにおける全身療法の導入時期は基準を満たしたうえで、中等症の早めの段階で導入した方が、患者さんにとってより良い状態での寛解維持が得られると考えております。既存の治療方法で粘りすぎず、非可逆的なスイッチが入る前に、慢性病変が主体となる前に、AD治療におけるwindow of opportunity、いわゆる適切な時期に全身療法の導入を検討する必要があると考えます。

本講演ではADの病態についてと、またデュピルマブの実症例を提示しながら、その使用方法から効果、安全性、さらに適切な導入時期について述べ、また他の全身療法との使い分けの見解についても触れたいと思います。ADの長期寛解維持におけるデュピルマブの位置づけを考えるうえで、本日の話が一助となれば幸いです。

講演2：コロナ禍で進んだワクチンサイエンスのカンブリア的進化

東京大学医科学研究所ワクチン科学分野 石井 健

コロナ禍で起きたワクチン開発研究の破壊的イノベーションにより、mRNAなどの新しいタイプのワクチンが約300日で作られました。2020年はワクチン開発研究の革命が2つ起きた年として歴史に刻まれるでしょう。

1つはmRNAという新たなワクチンの登場、2つ目はワクチンの臨床試験方法の革命です。

ワクチンのサイエンスはコロナ禍以前は注目度の低い分野でしたが、パンデミックで一変し、その波及効果は予想をはるかに超え、分子（学術）から倫理（社会との接点）まで広くいきわたりました。いまや感染症やワクチンを軽視しがちだった基礎生物学、医学研究、臨床研究、社会科学分野にも新しい潮流が生まれてきており、これまでになかったレベルで異分野融合が進み、次なる破壊的イノベーションがおこることが期待されます。

ワクチンを国防、外交の重要な戦略医療物資として捉えていた米英中ロは、パンデミック発生から1年を待たずワクチンを開発、製造、海外に供与輸出を可能にし、ワクチン開発研究の歴史を塗り替えました。一方国産ワクチン開発は大きく立ち遅れ、ワクチン敗戦と揶揄され、日本のワクチン開発研究、審査行政、接種事業、国防、外交への展開、ワクチン忌避など、多くの点で課題が残されています。2021年6月、世界はG7を筆頭に次のパンデミックでは100日でワクチンを世界に届けるという未踏の目標を掲げ、当時の菅首相が日本政府としてそこにコミットしたと聞いています。我々は東大国際ワクチンデザインセンターを立ち上げ、東大、日本全体のアカデミアの基礎研究力、ワクチン開発力を上げるために学生、若手、異分野の研究者を巻き込み、ワクチンを平時から作っておくモックアップワクチン、部品を作って有事には組み立ててベストなワクチンを開発するワクチンのモジュール化を目指しています。

一方、また広く世界を見渡すと、ワクチン忌避や、ワクチン接種が進んでいない地域、国も多くあり、このようところで感染がくすぶり、変異株が頻出するリスクも危惧されています。日本でも以前からワクチン禍といわれる課題が長年存在し、HPVワクチン（通称子宮頸がんワクチン）問題などが残っています。難題ばかりですが、それでもめげずに、急がば回れの精神で、安全で安心なワクチンを開発し、世界全体が健康になるべくユニバーサル・ヘルス・カバレッジという言葉を具現化することが我々が目指すべき方向ではないかと思えます。

（担当幹事：齊藤和美、河野真純）

委員会報告

在宅医療委員会だより

小野田雅仁

2022年度は、9月に在宅医療勉強会、翌2月にフットケア研究会を、いずれもオンライン形式で開催しました。いずれの会もとても深い内容で、日常診療に直結する素晴らしいお話を伺うことができました。コロナ禍以降、2021年からはオンラインという形で開催してきましたが、2023年度は、対面形式も含めての開催を検討していきたいと思っています。

●第29回在宅医療勉強会

日時：2022年9月15日（木）19時～20時45分（Web配信）

会場：TKPガーデンシティ PREMIUM横浜ランドマークタワー

参加者：81名（医師64名、看護師14名、その他3名）

共催：マルホ株式会社

特別講演Ⅰ：コロナ禍での在宅医療と必要とされる皮膚科往診

みずじゅんクリニック 水上潤哉

新型コロナウイルス感染症は外来・入院診療のみならず、在宅医療にも大きな影響を与えている。救急医療や入院治療の切迫と共に、自宅療養者への往診や訪問看護等も重要な診療のあり方となっている。このように往診や在宅医療への需要が高まる中、皮膚疾患の診断治療を求められることも少なくない。コロナ禍での在宅医療の現場と、必要とされている皮膚科往診がどのようなものかお話しする。

特別講演Ⅱ：爪白癬は必ず確定診断後に治療を始める ～新しい診断方法も有効活用する～

埼玉医科大学皮膚科教授 常深祐一郎

爪白癬は表在性白色爪真菌症 (SWO型)、近位部爪甲下爪真菌症 (PSO型)、遠位側縁部爪甲下爪真菌症 (DLSO型)、全異栄養性爪真菌症 (TDO型) に分類される。SWO型は外用薬治療が第一選択であり、DLSO型は初期なら外用薬が選択肢といわれることもあるが、治癒率や治療期間の点で経口薬が第一選択となる。軽症のうちにはしっかり治療して治癒に導くという考えである。爪甲の正常部に近い混濁部に白癬菌が存在するため、鏡検の際は近位部まで削り込んで検体採取するのがコツである。TDO型は表面まで全層にわたり白癬菌が侵入しているが高齢者に多く爪がほとんど伸びていない症例もあり、そのような場合経口抗真菌薬を用いても難治であり、爪白癬も足白癬も全て含めて足白癬用の外用薬剤を塗布し悪化や拡散防止に目標を変えた方が現実的である。もちろん延々と爪白癬外用抗真菌薬を塗布しても改善しないので、そのような漫然とした治療も慎む。

爪白癬の検査キットとして2022年6月に発売されたデルマクイック爪白癬はインフルエンザのキットなどと同じようなイムノクロマトグラフィーを検出原理としている。使用方法はチューブに検出液、検体を入れてストリップを入れるのみであり、抽出液の性能が良く、抗原をしっかり抽出するので、入れた検体のどこかに白癬菌の抗原があれば検出することが可能である。鏡検とデルマクイック爪白癬は相補的に活用することで診断精度が向上する。またデルマクイック爪白癬の使用時にはレセプトの摘要欄への使用理由の記載が必要である。また、鏡検との併算定は可能となっているが各都道府県の基金により見解が異なる可能性がある。

爪白癬治療の基本は経口抗真菌薬であり、テルビナフィンかホスラブコナゾールを用いる。テルビナフィンは安価であり、後発品でもよい。肝機能障害と血球減少、横紋筋融解に注意する。ホスラブコナゾールは短期投与が特徴であり、アドヒアランスが低下しにくく、また、きれいな爪が出るのが速いので、治療完遂率が高い。肝機能に注意する必要がある。ただし、軽度の肝機能異常であれば投与開始でき、投与中に軽度の異常が見られても継続することも可能である。また中等度以上の異常がみられた場合、いったん休薬して、回復後に再投与し、12週間分完了すると、しっかり効果が得られる。酵素誘導で γ -GTPが上昇することがあるので、GOTやGPTに変化がなければ (γ -GTP単独上昇)、投与継続してよい。両薬剤とも併用禁忌がなく併用注意薬も少ないため、使いやすい。

爪白癬は既存の検査法に新しい手法が追加され、さらに治療薬も新薬が登場し、正確に診断し経口薬で積極的に治療して完全治癒を目指す時代になっている。

●第17回神奈川フットケア研究会

日時：2023年2月16日 (木) 20時～21時 (Web配信)

会場：TKPガーデンシティ横浜

参加者：107名 (医師87名、看護師17名、その他3名)

共催：サンファーマ株式会社

特別講演：下腿・足の病変・足爪白癬とそのケア

さとう皮膚科 佐藤俊次

下腿や足の病変により、発熱や痛みが生じたり、皮膚潰瘍を形成することがあります。さらに進行すると下

肢の運動機能の低下や転倒のリスクの増加を招き、行動範囲が狭くなるなど、日常生活に支障をきたすことがあります。歩行に影響する可能性のある皮膚潰瘍や下腿・足の皮膚病変について、今回は、これらを予防することや早期に対処する目的で、当院で経験した症例とそのケアを中心にお話させていただきます。

委員会報告

広報・イベント委員会だより

渡部秀憲

今年度から前任の小林誠一郎先生に代わってイベント委員会の委員長となりました渡部秀憲です。今回委員会の統廃合によりイベント委員会と皮膚の健康委員会が一緒となり広報・イベント委員会に統一されました。今後の活動については委員の先生方と協議しながら考えていきたいと思っております。どうぞ宜しくお願い致します。

今年度の皮膚の日イベントは、コロナ禍のため以前のような対面での開催は叶いませんでしたが、WEBで開催することができました。テーマは小林先生から引き継ぎ今回は「美容」とさせていただきました。11月12日は「いい皮膚の日」として日本記念日協会に登録されているそうです。

今年度は埼玉県皮膚科医会の皮膚の日委員会の委員長の中捨克輝先生の計らいで、埼玉県皮膚科医会のTwitterで神奈川県をはじめ全国の皮膚の日イベントを紹介していただきました。

今後も県民への皮膚疾患の正しい理解と啓蒙のため、11月の文化の日に県民向けの公開講座を開催していく予定です。何かいいテーマがありましたら是非ご提案をお待ちしております。

●2022年度「皮膚の日」行事報告

日時：2022年11月3日（木）14時～15時

Web開催

テーマ：美容

主催：日本臨床皮膚科医会南関東山静ブロック、日本皮膚科学会、神奈川県皮膚科医会、マルホ株式会社

後援：厚生労働省、日本医師会、NHK

【プログラム】

開会の挨拶：神奈川県皮膚科医会会長 川口博史先生

講演 1：美容皮膚科を知っていますか？美容皮膚科を受診する前の基礎知識

講師：テティス横濱美容皮膚科院長 濱野英明先生

講演 2：汗トラブルと対策 ～スベスベお肌になるヒント～

講師：野村皮膚科医院院長 野村有子先生

閉会の挨拶：神奈川県皮膚科医会幹事長 畑 康樹先生

参加者：77名（視聴者数）

濱野先生からは美容皮膚科について一般視聴者にも分かりやすく解説していただきました。受診するにはや

や敷居が高い（個人的な考えですが）美容皮膚科について、受診する前の基礎知識として、どのようなことで相談するのが良いのかお話ししていただきました。

野村先生からは汗トラブルと多汗症について分かりやすく解説していただきました。腋窩多汗症の外用薬が保険適応となり、脇汗でお困りの患者さんにも朗報となりました。今後は手汗、足汗の外用薬が保険収載されることを個人的には切望しています。今回共催いただきましたマルホ株式会社の関係者の方々には、準備の段階から当日の会の運営までご支援いただき、この場をお借りして御礼申し上げます。

委員会報告

企画・学術委員会だより

河原由恵

2022年7月より医会の執行部体制が変わり、委員会は再編成され、企画委員会と学術委員会が統合されて企画・学術委員会となりました。そして、私、けいゆう病院の河原が委員長を拝命いたしました。今まで（広報）編集委員会や会計の仕事に携わって参りましたが、心新たに新委員会業務と向き合う所存ですので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、ご存じのように、（旧）企画委員会は年3回会議を開催し、よりよい例会作りのために担当幹事の先生と委員が意見交換を行って、例会の骨子を決めております。私が委員長を引き継いだ昨年7月以降も新型コロナウイルスはなかなか収束する兆しがみえませんでした。Webは時間制約のある先生、遠方の先生にご負担少なく参加いただける利点がある一方、face to faceでの意見交換も大切と考え、会議は感染対策に留意しつつハイブリッドで開催してきました。いずれの回も大変活発な意見交換がなされ、その結果が充実した各例会（2022年度は第167回、第168回、第169回です）となっていることは先生方の記憶にも新しいことと思います。そしてこの原稿を準備している2023年4月現在では、第174回例会までの担当幹事が内定しております。

神奈川県皮膚科医会では長いこと各例会ごとに担当幹事を定め、その先生のアイデアを基に例会を構成してきました。昨今では医療・製薬業界の事情から、共催メーカーさんと協同で計画する部分もありますが、バランスをとりつつ、担当幹事の先生の熱い思いが伝わる、そして会員の先生方に聴講してよかったと思っただけの例会運営のため、業務をすすめています。

2022年度の活動報告

2022年7月6日（水） 第166回例会総括、第167回例会準備会

2022年12月8日（木） 第167回例会総括、第168回例会準備会

2023年3月9日（木） 第168回例会総括、第169回例会準備会

なお、今年度は学術委員会としての活動はありませんでした。

健保委員会だより

高須 博

社会保険支払い基金では、2021年9月より「AI（artificial intelligence）により、人による審査を必要とするレセプトと必要としないレセプトへの振分機能を実装し、その精緻化を図り、新システム稼働後2年以内にはレセプト全体の9割程度をコンピュータチェックで完結することを目指す。」としてAIが導入されています。AIを活用する目的は、審査の効率化と高度化です。これを実現するためには、人が見るレセプトを極力少なくする一方で、審査の質を保つためには人が見ないレセプトに査定・返戻すべきレセプトが極力混入しないようにする必要があります。AIとコンピュータチェック（CC）を組み合わせ、審査の効率化・高度化と質の確保を図ることとしています。このことにより、審査委員が直接見なければならないレセプトなのかどうか仕分けをし、医学的判断や専門的な判断が必要なレセプトに人的資源を投入することができます。AIの役割は、審査することではなく、「人が目視で確認すべきレセプト」と「CCで完結させるレセプト」に振り分けることとなっています。

以上建前を書かせて頂きましたが、実際何が変わったかという点、導入前はCCでチェックがかからないレセプトは「目視すべきレセプト」から外れていましたが、導入後は全ての施設のレセプトがAIとCCにかかり、選ばれた「目視すべきレセプト」の全てを審査委員が拝見しています。具体的には、今まで査定を受けていなかったレセプトが、AIとCCにより「目視すべきレセプト」に振り分けられ、査定されるケースもあるかもしれません。私のレセプトも支払い基金で査定を受けています。AIに対応するためには、薬剤においては、少なくとも薬剤の適応症と傷病名に注意する必要があると考えます。

2022年度健保委員会は下記の活動を行いました。

1. 委員会

①第1回健保委員会

日時：2022年6月29日（水） Zoom会議

議題：①健保Q&Aの回答の検討

②審査上の問題点に関して

②第2回健保委員会

日時：2022年11月30日（水） Zoom会議

議題：①健保Q&Aの回答の検討

②審査上の問題点に関して

③第3回健保委員会

日時：2023年3月1日（水） Zoom会議

議題：①健保Q&Aの回答の検討

②審査上の問題点に関して

2. 発表

①第166回例会

日時：2022年7月3日（日）

担 当：健保Q&A（蒲原）

②第167回例会

日 時：2022年12月4日（日）

担 当：健保Q&A（小林）

③第168回例会

日 時：2023年3月5日（日）

担 当：健保Q&A（高須）

お知らせ：デルマクイックHSV、アメンアリーフPITについて

委員会報告

編集委員会だより

高橋さなみ

昨年7月3日、川口博史先生が第8代会長に、鎌田英明前会長が顧問にご就任され、それから間もない7月10日に「神皮」29号は無事発刊致しました。そして原尚道先生、花田美穂先生のおふたりが編集委員会に新たに加わって下さいました。

本年1月26日、「神皮」第30号発刊にむけて、第1回編集委員会をZoomにて開催しました。そして、執行部の先生方、委員の先生方の人脈を頼りに、例年どおり各コーナーへの執筆依頼をさせて頂き、多くの先生方が快くお受け下さいました。また、昨年7月、12月、今年の3月に行われた例会は、担当幹事の先生方のご報告下さり、各種委員会の報告、地域医会だよりは担当の先生方が例年どおりにご執筆下さいました。神皮へようこそこのコーナーにも新入会員の先生方が自己紹介文を送って下さいました。

このように先生方の多大なご協力があり、第30号は本年7月2日に無事に発刊できそうです。ほんとうにどうもありがとうございました。

そして「神皮」発刊において、毎年たいへんお世話になっていますかまくら春秋社の編集者の方、また広告のお申込みをいただいた会社の方々に、この場を借りて御礼を申し上げます。

●2022年度の活動報告

2022年5月26日（木）「神皮」第29号 第2回編集委員会 Zoomにて開催

2022年7月10日（日）「神皮」第29号 発刊

2023年1月26日（木）「神皮」第30号 第1回編集委員会 Zoomにて開催